



日本社会福祉教育学会

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education

NEWS LETTER No.44

事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1

東北公益文科大学 小関研究室気付

Tel. 0234-41-1288 ☎ : info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2024年3月31日発行

目次

1. 巻頭言	1
日本社会福祉教育学会 理事 小関 久恵	
2. 日本社会福祉教育学会 第14回春季研究集会	3
◆参加者の声 第14回春季研究集会に参加して	(関西学院大学 竹森 美穂)
3. 福祉実践教育	5
連載コラム ソーシャルワークとリサーチ あれやこれや	
◎最後に思うこと、そしてこれから	(関西学院大学 安藤 幸)
4. 会員向けアンケートご回答のお願い	6
5. お知らせ	7
6. 編集後記	8

1. 巻頭言

教養としてのソーシャルワークの学びの可能性

日本社会福祉教育学会 理事 小関 久恵 (東北公益文科大学)



理事 小関久恵 会員

高等学校の現代文に「わたしはあなただったかもしれない」という作品がある¹。著者は大学生の時に、痩せ細ったアフリカの子どもたちが写る海外援助の電車広告に目が留まり、添えられていた「わたしはあなただったかもしれない」という言葉が心に残る。のちに記者となった著者は「もしわたしがあなただったらこの現実をどう感じるか、何を望むか、何を分かっ

てほしいと思うか」等、精一杯想像することを取材の大原則とした。

1 大脇三千代『社会の今を見つめて～TVドキュメンタリーをつくる』岩波書店、2012年

大学で社会福祉士養成に携わる中で、ソーシャルワークが生まれ発展してきた背景には、いつの時代も先人たちがこの感覚を核に持ち続けてきたことがあると感じている。他人のことを自分のことのように感じる感覚、そして自分に何ができるのかと考える。この繰り返し、ソーシャルワークの理論や方法を拡大させていったのではないかと思う。

私が担当しているソーシャルワークのモデル・アプローチを学ぶ授業では、はじめに『ソーシャルワーク・トリートメント』上巻の第1章に掲載されている表（人間活動をどのような視野から捉えられるかを分類）を参照する²。教員になったばかりの頃は、他分野から援用した理論が並び、専門性が欠如しているように感じたこともあった。しかし、これだけの理論や方法を編み出した足跡の中に、目の前で、あるいは遠くの国で起きていることでも、人間が抱える諸問題に心を寄せ、あらゆる切り口から理解し解決しようと試行錯誤した証があることを実感する。

私が所属している東北公益文科大学は、「公益」を理念として経営、政策、地域福祉、国際教養、観光・まちづくり、メディア情報の6つのコースが設置されている。福祉分野の単科大学では無いため、社会福祉士養成の指定科目（実習・演習関連科目を除く）の履修者には、他コースの学生もいる。上記の授業も、社会福祉士を目指さない学生が半数ほど履修している。

社会福祉志望者ではない学生にとってのソーシャルワークの学びの意味や、社会福祉士志望者がそうではない学生と学ぶ環境についてネガティブな側面から捉えていた時期もあったが、今では各種アプローチやモデルから理解する「人や社会を捉える理論や視座」は、いわば「教養としてのソーシャルワーク」の学びにつながっていると感じている。

以下、ある履修者のコメントから引用して紹介する。



私自身、ソーシャルワーカーに興味があったわけではないし、福祉関係の仕事に就くわけでもない。しかし、これらを知ることによって何か役立つときが必ず来ると思う。自分の祖父母や両親などが体の不自由な状態になったとき、ソーシャルワーカーという職業人ではないが、サポートする人間になった際には今回学んだ知識を思い起こして、実践したい。

また、この授業では人が生きていく上で大切になる考え方、そしてこれからの超高齢社会に必要なアプローチを多く知ることが出来て、とても自分の力になったと思う。知識としてインプットしたものを、次は活用して人のためになれば自分自身の幸せにも繋がるはずだ。

また、グループワークやコミュニティ支援、その他関連技法等を学ぶ授業を履修した政策コースの公務員志望の学生は、以下のように学びをまとめてくれた。

公務員には、地域と密着した活動を行い住民にとっての利便や安心安全に繋がる働きが求められている。地域を一つの『グループ』と捉えることで、互いが互いを支え合い、一人ひとりがパズルのピースになるような、誰一人として欠けてはならない環境を形成していくことが、ソーシャルワークを活用した公務員の新しいあり方として、自分にできることではないかと思う。

これらの学生たちは社会福祉の専門職になるわけではないが、行政や民間企業で将来働き、市民の一員（今もだが）となる。一人ひとりが集団や地域コミュニティの一員であることを自覚し、福祉課題は特別なものではなく「わたしはあなただったかもしれない」という感覚、そして「わたしの立場からできることは何か」、つまり「応答可能性」(responsibility)を、ソーシャルワークの学びが引き出すことができるのではないかと感じている。

他方でこの環境は、社会福祉士志望者にとっても、専門職として将来連携・協働する立場になる相手と互いの理解を深め、どのように歩み寄れば良いのかを実践的に考えることができる絶好の場であるとも感じている。

2 フランシス・J・ターナー編（米本秀仁監訳）『ソーシャルワーク・トリートメント 上～相互連結理論アプローチ（第4版）』中央法規、2006年。現在は第6版が発行されている。

専門職を目指す学生と、専門職が連携・協働することになる市民としての学生。異なる立場にいる二つの対象に同時に教育する難しさもあるが、本学ならではの教育環境を、これからもさらにうまく活用できるようにしたいと考えている。学生たちの教室の中での対話が、互いに関心を向け合う「ケア」に満ちた社会をつくるプロセス³の小さな一歩につながることに希望を持ち、これからも学び合いの場をつくっていきたい。

3 ジョアン・C・トロント著/岡野八代訳著『ケアするのは誰か？新しい民主主義のかたちへ』白澤社、2020年。いかにケア活動が編成されるべきかといった一般的な条件について政治（日常生活の中で行われる小文字の政治と大文字の政治の両方）的に決定する必要性を指摘している。

2. 日本社会福祉教育学会 第14回春季研究集会

2024年3月3日（日）13時～16時30分、関西学院大学梅田キャンパスにて日本社会福祉教育学会第14回春季研究集会「社会福祉士養成カリキュラムにおける240時間実習実施の課題解決に向けて」が開催された。

本研究集会は、第19回大会（2023年8月26・27日開催）時のワークショップ（「新カリキュラムに対応した実習及び演習プログラム開発ワークショップ」）（コーディネーター：川島恵美会員（関西学院大学）、ファシリテーター：高杉公人会員（新見公立大学）、サンプルプログラム提供者：平尾昌也先生（関西学院大学））の続編として開催された。



第14回春季研究集会（関西学院大学梅田キャンパスにて）

研究集会冒頭、本学会会長の志水幸会員より、「挨拶の中で話をすることがふさわしいか否かという話ではあるが」と前置きの上、本学会設立の呼びかけ人のお一人であり、初代事務局長、副会長を務められた米本秀仁先生（北星学園大学名誉教授）が昨年12月3日に他界されたという話があった。その後、心より哀悼の意を表するとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げるべく、参加された方々とともに1分間の黙祷が行われた。

会長挨拶後は、初めに2箇所実習の実施形態ごと（60時間＋180時間とそれ以外）のグループに分かれ、各々の大学等で実習を行うに際し、どのような課題があるのか、どのようなことに工夫をしているのかなどについて意見を出し合い、各グループ、発表を行った。



会長挨拶
志水幸会員（北海道医療大学）

次に、つなぎの実習指導（事前・事後指導を含む教育目標や教育内容など）をどのように行っているのかなどについて各グループにて各々の考えを出し合う機会を設けた。

当日の詳しいスケジュールは、以下のとおりである。

なお、第19回大会時のワークショップの内容は、2箇所実習に関する体験を持ち寄り、実習実施パターンによる4つのグループに分かれ、事前・事後学習も含めた課題について出し合い話し合う機会であった。

ワークショップの流れ	
13:00～13:10	挨拶・進め方等
13:10～13:30	アイスブレイク・グルーピング
13:30～14:20	グループワーク① ソーシャルワーク実習・実習指導の課題と養成校の対応・工夫
14:20～14:30	発表:1グループ×5分
14:30～15:50	グループワーク② つなぎの実習指導
15:50～16:10	発表:1グループ×10分
16:10～16:30	質疑応答・クロージング

グループワークでは、実習先と養成校とが連携する中での課題や合理的な配慮を要する学生への対応のあり方などといった課題があげられた。このような課題に対し、工夫している点については、各々、頭を悩ませながらも工夫していこうとする内容の回答があげられた。

その他、2箇所実習を行うに際し、実習の事前・事後の学習をどのようにスムーズに行っていくのかといった、つなぎの実習指導に関しては、学生のモチベーションが上がるようなさまざまな工夫が挙げられた。

質疑応答時では、学生1人に対し、各実習先の実習指導者間だけではなく、各養成校においてもどのような連携を取っていく必要があるのかなどといった240時間実習ならではの課題があげられた。

今回、各養成校等、学生がより良い実習を行うことができるように240時間実習を実施する上で抱えている課題に対し、参加された方々が知恵を出し合う充実した時間となったのではないかと感じた。

参加された皆さま、年度末のお忙しい中、ご参加いただき誠にありがとうございました。

次回、皆さまにお会いすることができるのは第20回大会（2024年9月7・8日（予定））を予定しています。

多くのご参加、お待ちしております！

コーディネーター
川島恵美会員（関西学院大学）



ファシリテーター
高杉公人会員（新見公立大学）



◆◆◆ 参加者の声 ◆◆◆

第14回春季研究集会に参加して

竹森美穂（関西学院大学）

昨年、本学会に入会し、春季研究集会には初めての参加でした。「社会福祉士養成新カリキュラムにおける240時間実習実施の課題解決に向けて」と題し、昨年の第19回大会開催校企画の続編として、①新カリキュラム下における実習及び実習指導の課題やその対応、②2か所実習のつなぎとしての実習指導のシラバス作成をテーマに、模造紙を使いながら、参加者の経験を持ち寄りワークショップに取り組みました。



グループワークを行う
参加者の皆さま

私が参加したグループは、4年制福祉系大学（通学・通信）、2年制福祉系大学、1年制専門学校と様々な教育課程が混在するメンバー構成でした。所属先によって、実習と実習指導の配置時期が異なるため、直面する課題も多様でワークショップとしての成果物を作り上げることは困難がありました。しかし、参加者それぞれの置かれている実情や、直面している課題、日々の教育活動の中で感じていることを共有する中で、2か所実習のつなぎについて、実習先との効果的な連携をどのように作り上げていくのか

等、状況は違えども共通する課題も見出されました。また、意見交換を通じて、実習と実習指導をどのように構成していくかという課題の一方で、教育機関だけではなく専門職団体や事業者団体等と一緒にソーシャルワーカー養成（それだけでは



グループワークを行う参加者の皆さま

なく、事業所の人材確保も含めて)に関わる課題を政策へとフィードバックしていく必要性について、改めて考える機会ともなりました。

私自身は、ソーシャルワーカーの継続学習に関心を寄せていることから、学生が養成課程時代に専門職として学び続ける土壌を耕すことが重要と考えています。現在2か所実習への対応に右往左往している状況ではありますが、今年度初めて新カリキュラムでの実習を経験した学生を見ると、マイナスばかりではないことも承知しています。一方、現場では人口減少時代における事業継続、人材確保などの問題が山積しています。学生の職業選択意識も刻々と変化をしています。そのような現状を踏まえて、新たな変更にどのように向き合い、効果的なものにしていくか、そして学生、現場、教員にとって負担感が大きくなりすぎずに取り組めるよう、修正すべきことは何か、実習・実習指導だけではなく、そして教育だけの問題ではなく、広い視野で捉えてゆくことがより一層求められるのではないかと感じました。



参加者の皆さま

今回の研究会参加を通じて、養成校の垣根を越えて共に考える機会を得ることができたのは、私にとってとても貴重な経験でした。実習教育に関して今後も本学会で諸先生方と継続的に考えていくことができれば幸いです。

3. 福祉実践教育

【連載コラム】ソーシャルワークとリサーチあれやこれや

⑥最後に思うこと、そしてこれから

安藤 幸（関西学院大学）

ニュースレターNo.38から5回わたって、[ソーシャルワークとリサーチ あれやこれや]と題したコラムを連載させていただきました。今回(第6回目)は最終回として、まずはまとまりのないまとめをし、最後に今後の期待も含めて今思うことをお伝えします。

第1回では海外における量的研究志向について、第2回では研究の根幹をなすものについて、第3回ではソーシャルワーク・サイエンスについて、第4回では研究における当事者について、第5回では不確かな時代における研究について、それぞれ思いを綴りました。そして毎回、「混合研究法」については触れたいテーマでありながら、なかなか着手できませんでした。

2023年は、抑圧されてきた者の声が堰を切ったように噴出した年だと感じています。これまで大きな社会や組織の中で押しつぶされてきた弱者の聲がぼつりぼつりと漏れ出し、世相の後押しもあってついには大きな声となって、社会全体を揺るがすまでになりました。このことは、最近話題となっている「マルアカ⁽¹⁾」や「ソフト老害⁽²⁾」など、世代間ギャップを表す言葉が新たに生み出されることにつながっているように思います。このような「声」を、私たちはどのように受け止めるのでしょうか。「ああ、また言ってるよ」「なんだ、そんなことか」「我慢が足りないなあ」「言われるこっちも辛い」などと軽んじてはいないでしょうか。真摯に耳を傾け、声を拾い上げる、それは質的研究に求められる姿勢だと思います。

その一方で、研究にはますます客観性が求められるようになっていきます。最近、海外のジャーナルへ投稿を試みたとき、研究プロセス(データ収集、データ、分析など)の開示を求められました。プロセスの開示には、(後の)研究者が「データ収集のプロセスを再現するのに十分な資料(sufficient materials for an independent researchers to reproduce the data collection procedures of the study)」と「報告されたすべての結果を再現するための情報(information for an independent researcher to reproduce all of the reported results)」が含まれていました。前述の情報は、研究の透明性を確保するために必要なもの



だと思えます。しかし、後述の情報については、何処までを指すのだろうかと疑問に思いました。例えば、使用する尺度の信頼性や妥当性は絶対に必要ですが、社会や人々の生活課題は個別化、複雑化してきており、「すべての結果の再現」は、ソーシャルワークの研究においては必ずしも現実的ではないように思えます。

ソーシャルワーカーである私たちは、日々VUCAな課題と向きあっています。2024年は、大きな災害とともにスタートしました。被災状況の把握や支援の遅れが際立ちました。SNSなどの普及で、被災された人々のリアルな声はライブで届きます。一方で、体系化された支援の必要性などはなかなか伝わりづらいものでした。これからインフラやライフラインの復旧などの目に見える復旧は、日々進んでいくことだと思えます。しかし、被災された人々の生活や心の回復は、同じようなスピード感で進むことはありません。研究においても、実践においても、質的と量的どちらの視点も忘れてはならないことを、私たちソーシャルワーカーは、心に留めておく必要があると思えます。

最後に、改めまして、このような連載の機会をいただきありがとうございました。研究者としてはまだまだ未熟者でありながら、ソーシャルワークにおけるリサーチについて自由に語る機会をいただいたこと、そして、「あれやこれや」にお付き合いいただいた学会の皆さまに、心からお礼を申し上げます。ささやかでも、皆さまが日々何かを感じ、考えるきっかけとなっていましたら幸いです。今後も「ソーシャルワークのこれから」について、学会の皆さまと対話する機会を持てますことを期待しています。



ありがとうございました。

- (1) 「マルハラメント」の略称。上司などから受け取ったLINEなどのメッセージが句点で終わっていることに対して、若者が距離感、冷たさ、恐怖を感じる。 (日テレNEWS, 2024年2月14日, 「“マルハラ”って何?上司からの「。」が怖い…「怒っている」「距離感感じる」の声 “世代間ギャップ” どうすれば…」,

<https://news.ntv.co.jp/category/society/efc415d552024e658a20e0524d9449db>)

- (2) 中堅(30代や40代)であっても彼らの言動は、若手(20代)にとっては威圧的なものとなること。



(FNNプライムオンライン, 2024年2月12日, 「『ソフト老害』は高齢者だけの問題じゃない 鈴木おさむ氏が放送作家をやめるキッカケにも 「40代でも行動次第では老害なんだ」」, <https://www.fnn.jp/articles/-/656319>)

4. 会員向けアンケートご回答のお願い

この度、本学会会員の皆さまが「社会福祉教育のどのようなことに興味関心を持っているのか」を把握し、今後の学会運営(大会や研究集会、ニュースレターなど)に役立てるのみならず、会員の皆さまのご意見・ご批判などを参考にしながら学会の更なる発展に生かすことを目的に、アンケートを実施させていただきます。

「(日本社会福祉教育学会で)こんなことを学びたい!」「こんなテーマを取り上げてほしい!」など、皆さまが普段抱えている意欲や学会へのご要望、ご意見などをこの機会にぶつけていただければ幸いです。

アンケート項目は、7項目となっております。お時間は、5分ほどで終わりますのでご協力のほど、よろしくお願いいたします。

アンケート実施期間：2024年4月1日から5月7日まで

今すぐ
CHECK!
→ → →



URL はコチラ ↓

<https://forms.gle/QSCKLKcFLyRuPovQ7>

↑ QR コードはコチラ



5. お知らせ

コンテンツ募集中!!

イベント開催情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践 tips(コツや秘訣)、おすすめ動画やウェブサイトなどのコンテンツも、随時受け付けています。皆様にとっておきの情報を、事務局 (nl.jsswe@gmail.com) までどしどしお寄せください。

新年度を迎え、ご所属先やご連絡先（メール等）等、変更された会員の皆さまは、お手数ですが事務局（info@jsswe.org）までご連絡いただけますようお願い申し上げます。



6. 編集後記

新しい年が始まり、3か月が過ぎてしまいました。早いもので、今年も4分の1が終わろうとしております。

明日からは2024年度が始まります。春は、出会いと別れの季節…お世話になった恩師や友人、同僚に感謝の気持ちを持ちつつ、新しい環境の中でご活躍される会員の方も多いかと思っております。



新しい土地や勤務先で頑張ろうとしている方に、「ミモザ」の花束をプレゼントしてみるのはいかがでしょうか。「ミモザ」の花言葉は、「感謝」「友情」と言われているそうです。

私たちニュースレター編集委員からも会員の皆さまへ、日頃の感謝の気持ちを込めつつ、今回の表紙を「ミモザ」にしてみました。

皆さま、「適度に」肩の力を抜きながら、穏やかな気持ちで新年度をお迎えできますことを祈念しております。

2024年度も、よろしくお願いいたします。

(ニュースレター編集委員 島谷綾郁)